



女性医師支援センター便り

働きやすい職場を目指して 角田市金上病院の取り組み

宮城県女性医師支援センター委員
宮城県女医会会長

鈴木 カツ子

宮城県女性医師支援センターは平成24年から女性医師支援を目的に県内の基幹病院を訪問し、男女共同参画を推進すべく活動してきた。現在まで大崎市民病院、みやぎ県南中核病院、石巻赤十字病院、東北労災病院、仙台オープン病院で情報交換会が行われている。

平成26年2月12日（水）、今回初めて角田市にある民間の金上病院を訪問した。医療法人金上グループは「地域に信頼される誠実な医療・介護」を理念に掲げ、病院（急性期病棟20床、慢性期病棟79床）、介護老人保健施設、グループホーム、居宅介護支援事業所、福祉介護ショップなどを多角的に運営している。医師は常勤医5名（男性3名、女性2名）、非常勤医師120名（当直医含め）内女性7名である。大学病院、関連病院の協力を得て内科は一般外来の他、循環器、呼吸器、消化器、消化器内視鏡、糖尿病、がん化学療法、甲状腺などの専門外来がある。外科は大学病院胃腸外科、肝胆膵外科より応援がある。グループ全体の職員数は約300名、女性の管理職は70%！とのことである（写真1）。



写真1 セミナー風景

櫻井芳明センター長のご挨拶から始まり、高橋克子副センター長の「日本医師会女性医師支援と宮城県女性医師支援センターの活動について」の講演があった。

角田市は人口約31,000人、丸森町は約14,000人、産業は農業が中心で高齢化率も高い。この地域は高次施設病院がなく、私的病院、個人開業施設が多い。金上グループはこの地域の医療・介護の一翼を担い、その創業は天保14年（1844年）、現院長は7代目とのことである。

当日の夕方は大雪の影響が残り、私と山本蒔子先生、小田泰子先生の到着は大幅に遅れてしまったが、山本蒔子先生の明快な司会進行で熱気ある会となった。参加者は約50名であった。副院長の安藤由紀子先生が「働きやすい職場を目指して」と題して金上病院の取り組みを講演した。医師としての26年の自分史を語られたが、結婚、出産、子育てを経験する過程で仕事を続けてこられたのは、友人、同僚、家族、夫、皆から強力なサポートを得ることができたおかげであったと話された。特筆すべきは1987年（昭和62年）名誉院長の英断により金上病院に院内保育所が開設されたことである。彼女が安藤正夫現院長と結婚する1年前のことである。2年後に長女を出産、7年後に長男を出産。院内保育所を利用しながら、仙台の実家から角田に子連れ出勤していたが、その後まもなく角田へ引っ越し腰を落ち着けて仕事が始まった。院内保育所を利用しながら勤務していた非常勤の女性医師も2008年常勤医として赴任している。

次いで大泉真奈美人事運営部長から“働きやすい職場づくり”について報告があった。

1 産休・育休の取得状況

年間常に10人ほどが利用しているが、育休はほとんどの職員が取得し、育休明けは、育児短時間勤務制度を利用しながら、また夜勤が難しいという職員には配置転換も考慮し、グループ全体でサポートする意識で取り組んでいる。休んでいる職員には連絡を密にして復帰しやすく心を配っている。

2 院内保育所について

先代院長が昭和62年に開設した院内保育所は、当時は珍しく“職場・地域社会みんなで子どもを育む”という精神は今も受け継がれ、愛されて育つ保育がなされている。定員は20名、保育士5名、保育補助者1名、保育料金は県内で一番安い。地域に開かれた一時預かり保育もある。収支的には年間1,000万円の赤字。今後24時間保育、病児保育、学童保育についても検討中（写真2）。

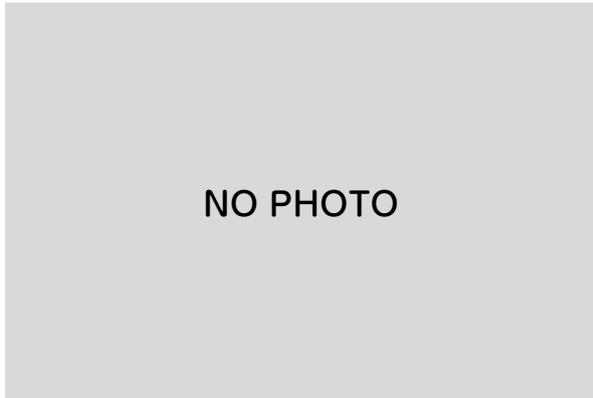


写真2 老健施設ゆうゆうホームの七夕祭りに参加

3 短時間正規雇用制度の採用

子育て中の女性に限らずライフスタイルに合わせて職員の要望に応えられるよう、準備を進めている。

その後活発な討論がなされたが、多くの女性を登用し、働き続けられる職場づくりに先進的な病院であっても、慢性的な医師不足、看護師不足は大きな問題であり、解決策はなかなか見つからない。これからも「人材が宝 人を大切に あなたが必要」このメッセージを伝えながら、地域の中で患者さんの人生に長く寄り添っていききたいという由紀子副院長の言葉が印象的であった。

今回金上病院を訪問して久しぶりに「一山一家」という言葉を思い起こした。300名の生活を支えているのは職員ひとり一人の連帯なのだろう（写真3）。

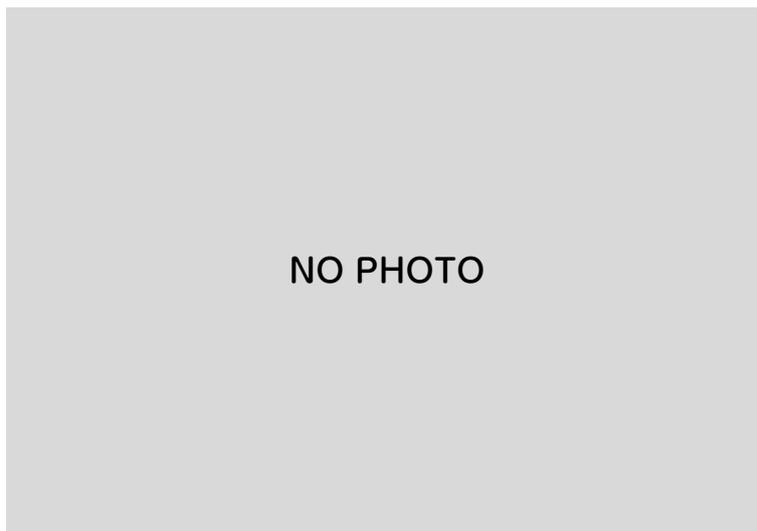


写真3 共に過ごした思い出を胸に卒園